主観的幸福感の日米比較
―世界価値観調査のデータを用いて―

安藤ゼミ　上田　楓

目次

第一章　序論
　第一節　問題関心　　第二節　幸せについて　　第三節　本研究の目的

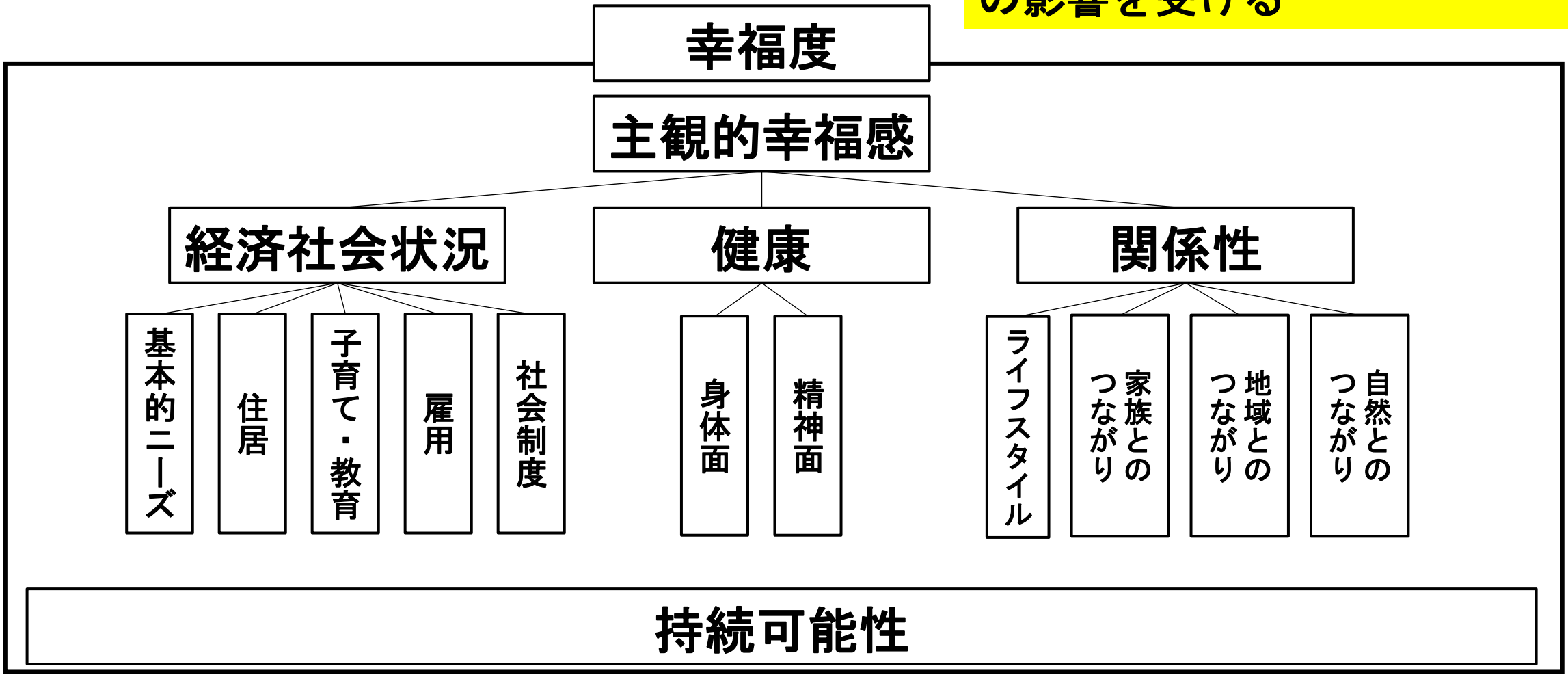
第二章　本調査
　第一節　目的　　第二節　方法　　第三節　結果　　第四節　考察

第三章　総括

引用文献

問題関心

松島ら(2013)
幸福度は、 主観的健康感、世帯収入、婚姻形態、職業形態、性別の影響を受ける



※幸福度に関する研究会『幸福度に関する研究会報告－幸福度指標試案－』内にある「幸福度指標試案体系図」を参照

問題関心

鄭(2014)
健康満足度、家庭満足度、生活満足度、社会階層意識の4項目の合計点を主観的幸福度とした際、アメリカ人のほうが日本人よりも主観的幸福度が高くなった

池田ら(2016)
第6回世界価値観調査を用いて、幸福感の国際比較を行った際、アメリカ人のほうが日本人より幸福感が高いことがわかった

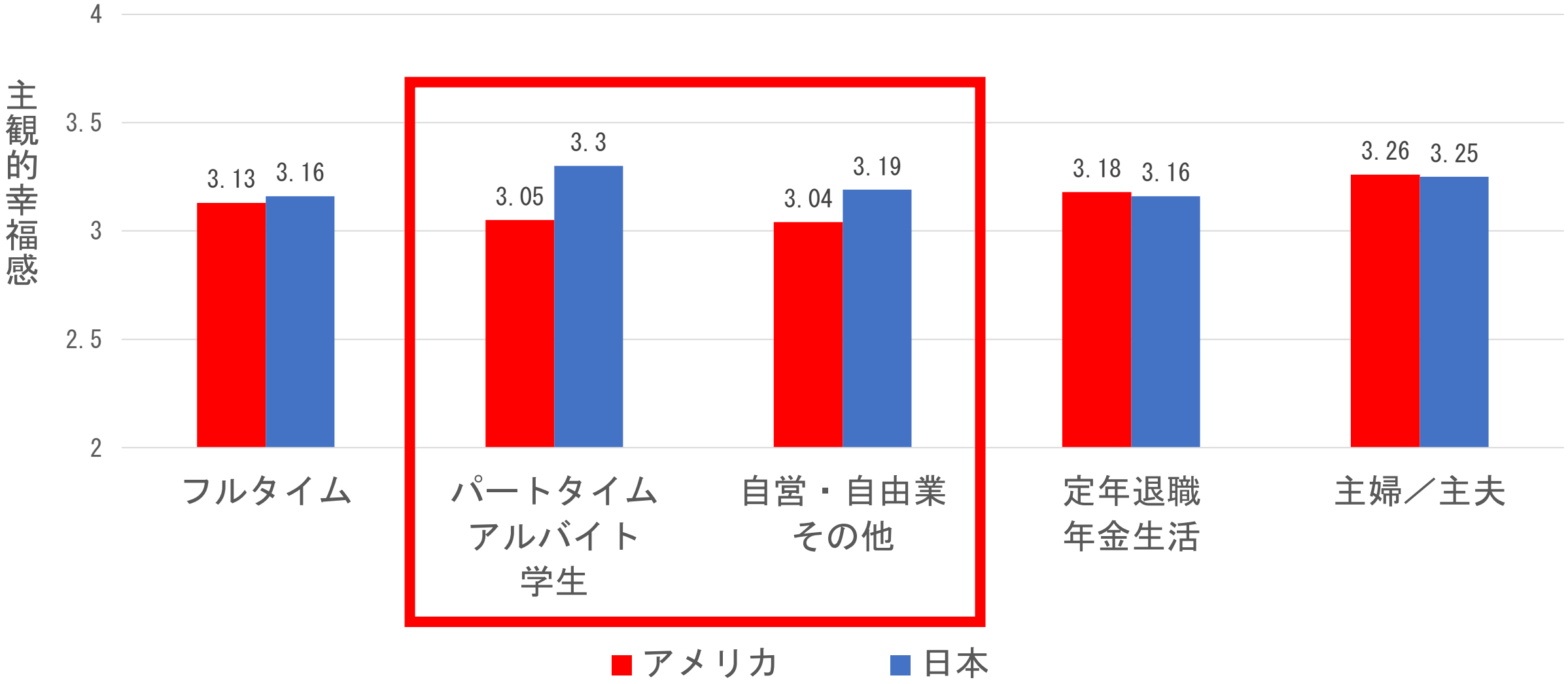
本調査

目的：主観的幸福感の日米比較

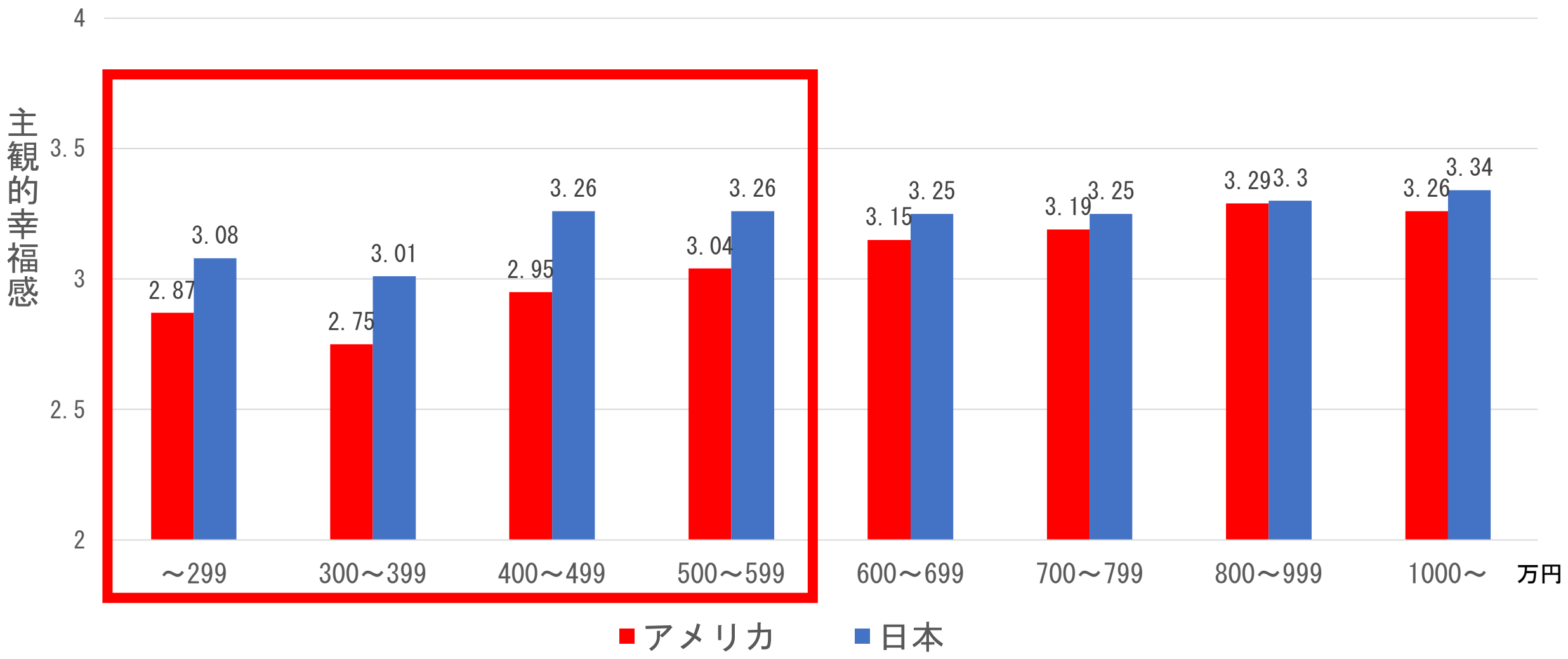
・性別　・年齢　・婚姻形態　・仕事形態　・所属組織形態
・貯蓄状況　・収入　・生活満足度　・家計満足度
・生活の程度（社会的地位）

方法：第7回世界価値観調査（World Value Survey Wave7）の2019年日本データと2017年アメリカデータを用いる

結果〈仕事形態と国籍による主観的幸福感〉



結果〈収入と国籍による主観的幸福感〉



考察

日本人の方がアメリカ人よりも主観的幸福感が高かった

〈先行研究と異なる結果に…〉

- 幸福感を測る際に使用した指標が異なるため
- 調査対象者が異なるため
- 調査が実施された年が異なるため

考察

パートタイム、アルバイト、学生、自営・自由業、その他の仕事形態に就いている者では、日本人の方がアメリカ人よりも主観的幸福感が高い

→収入などが不安定な職種の場合、アメリカでは幸福感が低くなるのではないか

考察

収入が中の下以下において、日本人の方がアメリカ人よりも主観的幸福感が高い

→アメリカは**社会保障制度**が日本よりも充実していないため、収入が低い人々において主観的幸福感に日米差が生じているのではないか

ご清聴
ありがとうございました